

麦づくり情報(No.5)



生育概況

1) 調査結果(3月22日調査)

場所	品種名		播種日	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	主稈葉数 (L)	葉色	概況
牛 津	サチホゴールデン 4条播き	本年値	12/7	67.3	952	11.2	36.9	草丈は平年より高い。(161%) 茎数は平年と同程度。(100%) 葉令からみた生育は平年より早い。
		平年値	12/4	41.7	951	8.8	39.3	
		農試本年値	12/10	68.0	931	10.3	-	
		農試平年値	12/10	48.1	976	9.3	-	
大 和	シロガネコムギ 8条播き	本年値	11/18	77.8	605	11.2	35.7	草丈は平年より高い。(165%) 茎数は平年よりやや少ない。(84%) 葉令からみた生育は平年より早い。
		平年値	11/28	47.2	717	8.4	43.2	
		農試本年値	11/20	74.4	778	10.0	-	
		農試平年値	11/20	58.0	710	9.0	-	

※農試本年値、平年値は作況の3月19日調査データを記載

1. 現況

気象概要：3月1半旬～4半旬は平年より高温少雨で推移

3月1～4半旬の平均気温は、平年比+4.4℃と平年より非常に高く推移した。降水量は平年比76%と少なく、日照時間は平年の103%と平年並であった。

生育概況

小麦で11月中旬に播種した圃場では出穂始め～穂揃期となっており、11月下旬に播種した圃場では葉齢が止葉葉位に達している。葉色はいずれも平年に比べ淡い。

大麦は11月播きの圃場では穂揃期となっており、12月初旬に播種した圃場では葉齢が止葉葉位に達し、芒が出始めている。葉色はいずれも平年に比べ淡い。

2. 出穂期予測

生育状況を反映し、11/15頃播種されたものは、やや早いから平年並

11月下旬以降に播種されたものは圃場によりばらつきが見られ、平年並～やや遅い

品種	播種期	年次	幼穂形成始期 (月/日) (前年差)		節間伸長開始期 (月/日) (前年差)		莖立期 (月/日)	出穂期 (月/日)
シロガネ コムギ	11/20	本年	2/3	-1	2/17	+2	2/19	未
		平年	2/4	0	2/15	0	—	4/3
	12/10	本年	2/22	-4	3/6	-1	3/8	未
		平年	2/26	0	3/7	0	—	4/1
サチホゴ ールデン	12/1	本年	2/8	—	2/20	—	2/26	未
	12/10	本年	2/12	+1	2/25	-2	2/27	未
		平年	2/15	0	3/2	0	—	4/1

今後の管理

1. 穂揃期追肥

R2年産の品質ランクにおいて小麦・大麦とも低タンパク傾向が指摘され、実需からは改善が求められている。下表を参考に散布する。また、小麦は製粉しないと利用できないため、生産するだけでなく、実需が望む品質（タンパク質含有率）に上げる必要がある。そのため、タンパク向上に直結する穂揃期追肥は倒伏しそうでも必ず施用する必要がある。

葉色の褪め方にかかわらず必ず施用

品 種	窒素量 kg/10a	実肥の施用量 (/10a)
パン用 はる風ふわり	5	硫安 25kg または 尿素 12.5kg
パン用 さちかおり	6	硫安 30kg または 尿素 15kg
めん用 チクゴイズミ	3	硫安 15kg または 尿素 7.5kg

葉色が薄い場合（出穂期頃の SPAD 値 40 以下）施用

品 種	窒素量 kg/10a	実肥の施用量 (/10a)
シロガネコムギ	2	硫安 10kg または 尿素 5kg
大麦	2	硫安 10kg または 尿素 5kg

★穂揃期追肥は出穂期3日後が効果的。それ以降に施用する場合は増量が必要となる。

※出穂期：圃場内の5割の穂が出た頃

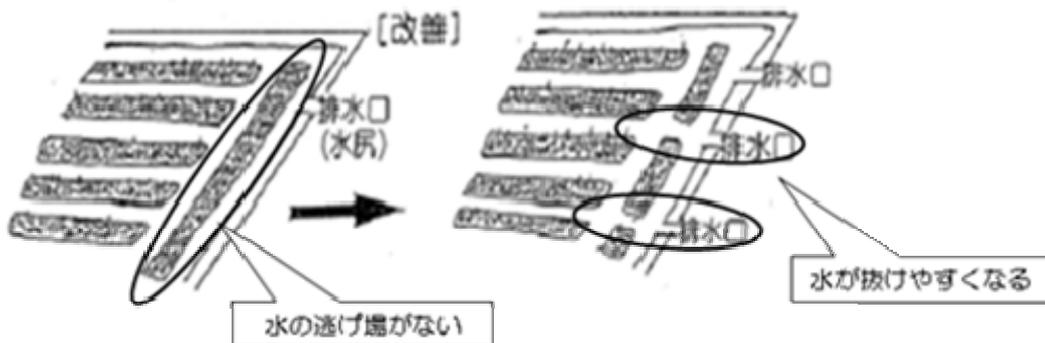
◆今作は播種が早く生育量が多い圃場や穂肥の施用が早かった圃場で葉色の褪めが大きいところが散見される。葉色を確認し、褪めている場合はシロガネコムギ・大麦でも上表を参考に施用。

◆乗用管理機での施用の場合、赤カビ防除との同時施用も可能

※液肥施用後、葉先などに肥料焼けがみられるが、収量や品質への影響は小さい。

2. 排水対策

今後、降雨量が増えることが予測される。湿害により根の生育が抑制され、登熟に影響するため、**排水溝を再整備するなど排水強化**を行う。



3. 防除 本年は気温が高く推移し、出穂期が早くなっているため散布時期が遅れないように各圃場の状況確認をする。網斑病・赤かび病は**予防が基本**

◆赤かび病：はるか二条およびパン用小麦については、2回防除する

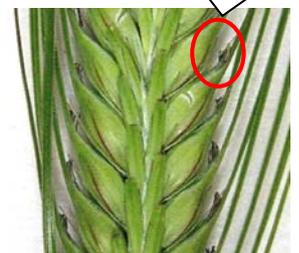
小麦

- ・開花期（＝出穂期の約7～10日後）に防除
- ・2回目の防除（1回目防除の10～20日後）

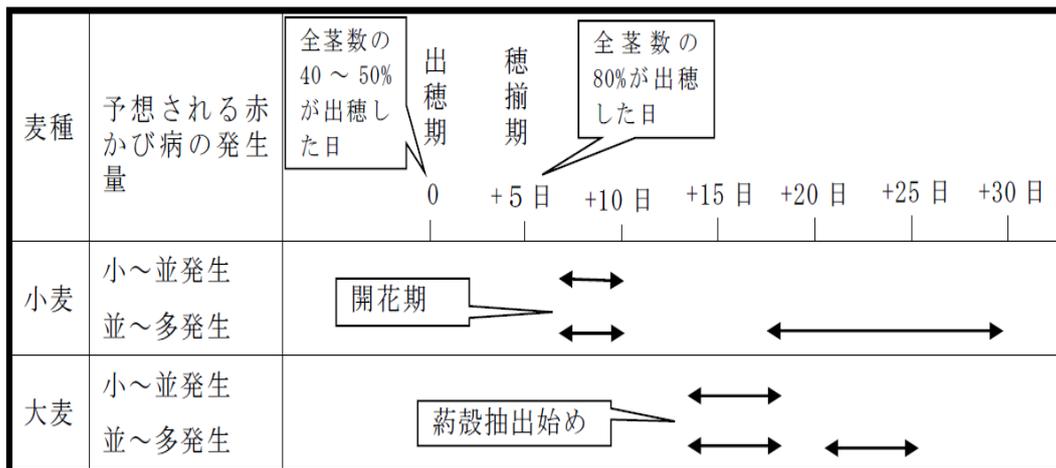
大麦

- ・葯殻抽出始め（＝出穂期の約2週間後）に防除
※多発生が予想される場合は2回実施（1回目防除7日後）
- ・トップジンM水和剤を使用する場合は、収穫前30日前までの使用となっているので注意する

大麦の芒（のげ）の下から
黒い**葯殻**が出る時期に防除



赤かび病の防除適期



注1) 出穂期とは全茎数の40～50%が出穂、穂揃期とは全茎数の80%が出穂した日。

注2) 小麦の開花期とは40～50%の穂が開花した日。

注3) 大麦の薬殻抽出始めとは、50%以上の穂で薬殻が見え始めた日。

注4) 大麦で2回目の防除を行う場合、薬剤の使用方法（収穫前日数）に特に注意する。

◆網斑病：一部圃場で下位葉に網斑病発生が見られている。上位3葉まで病斑を進展させてしまうと、登熟に影響し大幅な減収・品質低下となるので、発生状況に合わせて早めに薬剤散布（チルト乳剤等）を行う。

大麦

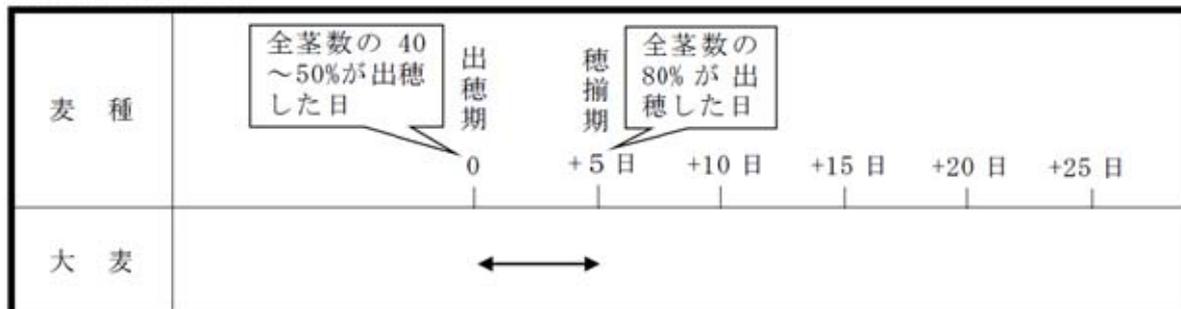
・防除適期は出穂期～穂揃期

※ただしこれより早い時期から発生株が散見され、病斑が上位葉に進展している場合は直ちに防除を実施する。



※網斑病が発生した大麦の様子
網目状の茶色い病斑ができ、周縁部は黄化している。

網斑病の防除適期



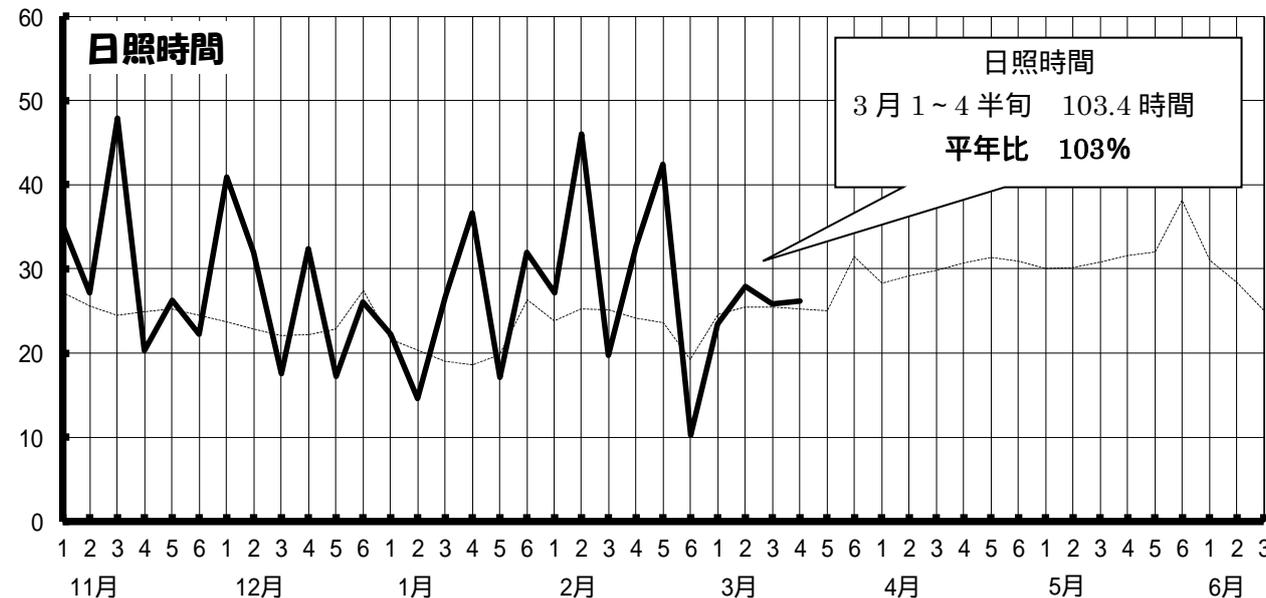
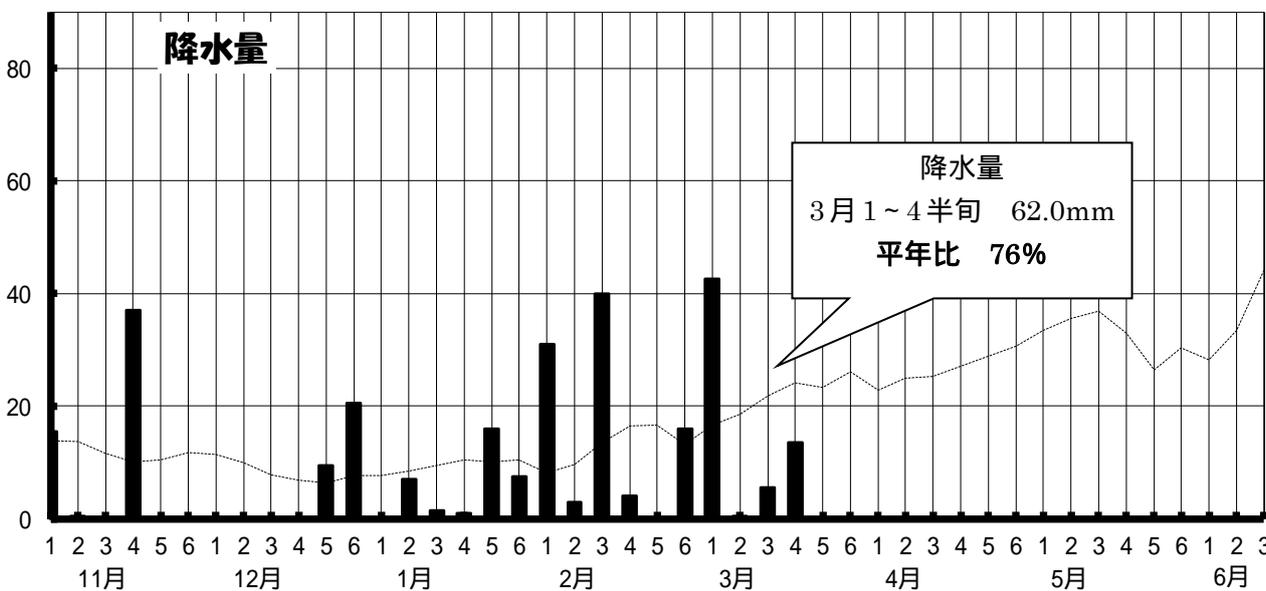
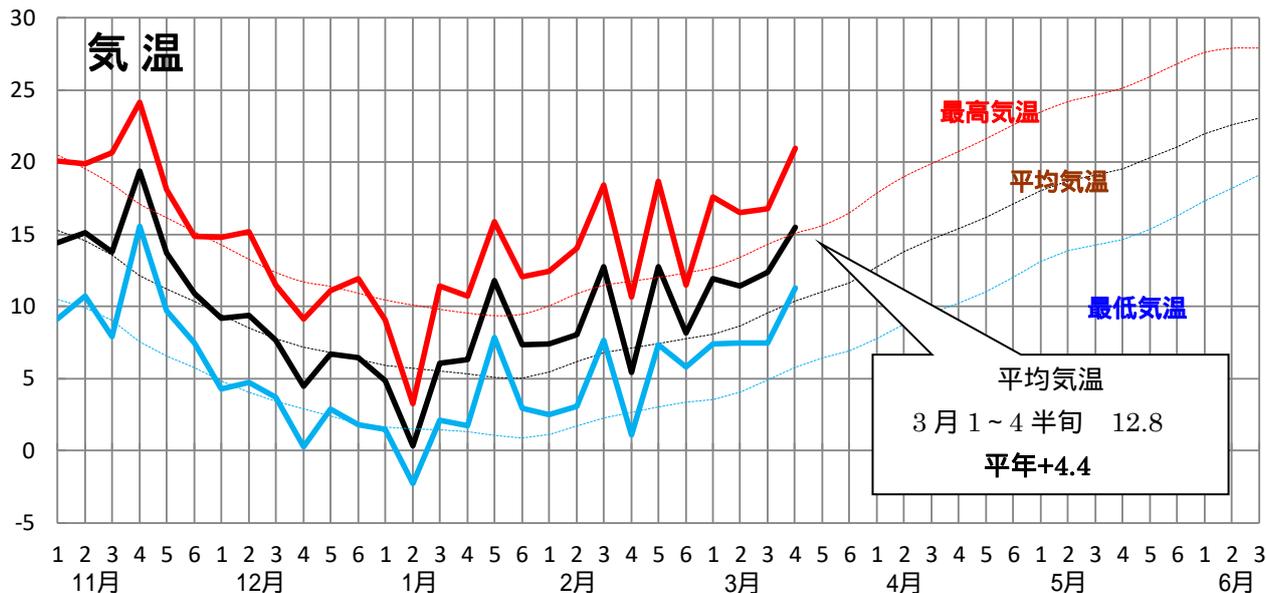
注1) 出穂期とは全茎数の40～50%が出穂、穂揃期とは全茎数の80%が出穂した日。

注2) 矢印は防除適期を示し、薬剤については次表を参照とする。

令和3年産麦類生育期間気象グラフ

アメダス観測値（佐賀）

佐城農業改良普及センター



グラフ中の点線は平年値